

2019年度「海外学校教育実地研究」（第2回目）報告

— イギリス（ダラム、ロンドン）視察 2020年2月8日（土）～16日（日） —

魚山 秀介・清水 静海・中村 雅子・蒲地 啓子・鈴木 康仁・
安藤 拓也・石川 真里代・小松 千草・石井 祐作

帝京大学大学院教職研究科

2019年度・海外学校教育実地研究〈ダラム・ロンドン〉報告

魚山 秀介

帝京大学大学院教職研究科

1. はじめに

今年度の本研修第2回目はイギリス国内の2都市（ダラム・ロンドン）の現地校を視察するという行程で実施した。（表1）

なお、コロナウイルスの影響で帝京ロンドン学園での宿泊が急遽不可となり、学園やその敷地内にあるISCA（ロンドン国際芸術高校）視察もキャンセルとなるなど、現地到着後に大幅な日程変更を余儀なくされた。また、ロンドン到着後にハリケーン（Ciara）が襲来して翌日に鉄道予約をしていたエジンバラ行が運行停止によって中止となり、ロンドン出国当日の朝にはハリケーン（Dennis）の影響でロンドン市内行きの地下鉄が運行停止となった。空港に到着することが出来ないと一瞬、血の気が引くなど多くのトラブルに遭遇したがなんとか予定通りに帰国することが出来た。引率者としてはスリル溢れる海外研修となった。

2. 2019年度（第2回目）の実施状況

(1) 訪問校

ダラムでは帝京大学ダラム図書司書のピンクス Miki さんに現地でのコーディネイトをお願いした。2日間で4つの様々な校種の学校（① Durham Trinity School・特別支援学校視察）、② Durham Johnston Comprehensive School・公立中等教育学校）、③ Durham 大学、④ Durham School・私立寮制学校）を視察するという非常に充実した行程を組んで頂いた。また残念ながらスコットランドの首都エジンバラでの社会教育施設視察は中止となったが、ダラム大聖堂やダラム城など市内をじっくりと見学をすることが出来た。

なお4日目には帝京大学ダラムキャンパス校長の今関雅夫先生から世界遺産ダラム城に関する具体的

でわかりやすい説明を頂いた。またダラム大学図書館などの施設も案内して頂き、オックスフォードやケンブリッジに次ぐ歴史を誇るダラム大学の構内を見聞することが可能となった。

ロンドンでは、Horsenden Primary School（公立小学校）とロンドン日本人学校を視察した。前者では、コロナウイルスの影響で授業見学が急遽キャンセルとなったがエマ校長との質疑応答を通じ、昨今のイギリスの教育政策の現状と課題を認識することによって今後の日本の動向について考察することが出来た。後者では、石山秀樹校長より海外における日本人学校の運営、特にOFSTED（イギリスの学校評価制度）審査の厳しさについてお話を聞くことが出来た。

(2) 事前・事後学習

本実地研究は2単位全15回の選択授業であるので第1回目講義として9月26日の昼休みに説明会を実施して日程の概要について概要説明をおこなった。

第2回目講義である11月18日・2時限目には冒頭で海外保険に関する説明を担当業者がおこない、その後は本研修の概要について説明をおこなった。

第3回目講義として1月9日・7時限目には各視察学校別に主担当を決定し、次回講義まで事前に調査をおこなってパワポにまとめるよう指示をした。出国前最後の第4回目講義である2月4日・5時限目それぞれの視察先についてのプレゼンを行い、お互いに情報共有をはかることが可能となった。そして第5回目から14回講義を現地での視察とし、帰国後の2月27日・3時限目に第15回目の講義として報告会を実施した。

2019年度(第2回目)の旅程表(表1)

月日	予定		
2・8	土	羽田発→ロンドン →ニューカッスル	ダ ラ ム キ ャ ン パ ス 4 泊
2・9	日	ダラム市内社会教育施設見学 (ダラム大聖堂など)	
2・10	月	① Durham Trinity School (特別支援学校視察) 視察 ② Durham Johnston Comprehensive School (公立中等教育学校) 視察	
2・11	火	③ Durham 大学視察 ④ Durham School (私立寮制学校) 視察	
2・12	水	ニューカッスル→ロンドン	ロ ン ド ン 3 泊
2・13	木	ロンドン市内社会教育施設見学 (大英博物館など)	
2・14	金	⑤ Horsenden Primary School (公立小学校) 視察 ⑥ ロンドン日本人学校視察	
2・15	土	ロンドン→羽田	
2・16	日	帰国→羽田	

3. 英国における社会科教材研究の有用性

今回の研修では引率教員2名以外に一般参加の教員3名、現職派遣のSLコース院生3名、学部から進学したSMコースの院生(中学校社会科)1名の合計9名が参加した。それぞれの参加者が本年報に今回の研修について投稿されているのでそれぞれ確認頂きたいが、本稿では英国における社会科教材研究の有用性について述べてみたい。

周知の様に英国は議会制民主主義発祥の地であり、明治期の日本は英国から政治制度や鉄道、郵便制度など現在に至るまでその影響力は色濃く残っており、その要因として明治期の指導者が幕末に英国へ留学して西洋の文明を学んだことにある。特に1863年11月に英国へ「密航」した5人の長州藩士・伊藤博文、井上馨、遠藤勤助、山尾庸三、井上勝は、「内閣の父」、「外交の父」、「造幣の父」、「工学の父」、「鉄道の父」と称されて日本の近代化に尽力したことからも日本と英国の関係性の深さをあらためて認識することができる。

そこで、今回の研修では現地の学校視察のみなら

ず、ダラムやロンドンでの社会教育施設見学を通じてSMコース院生(中学校社会科)の教材研究力を培うことを主な目的の一つとした。

例えば、ダラムでは帝京大学ダラムキャンパスに宿泊しながらダラム大学セント・メアリーズ・カレッジの食堂を使用した。St Mary'sの意味が聖マリア(the mother of Jesus Christ)を意味することや日曜日早朝のダラム大聖堂のミサを体験することによって英国国教会の成立について認識させることが可能となった。なお、当初予定していたエジンバラ市内社会教育施設見学では、「経済学の父」で『国富論』の著者アダム・スミス(エジンバラ大学出身)の像を見ることが出来なかったことは非常に残念であった。また、ダラムから鉄道で2駅の距離にあるニューカッスルは、かつて造船で有名な場所で、日露戦争で活躍した軍艦6隻は当地で建造され、連合艦隊司令官・東郷平八郎がニューカッスル・ユナイテッドのホームゲームを観戦したことも教示した。

ロンドンでは、ナショナルギャラリーのダビンチ「岩窟の聖母」などの宗教絵画を見学した後、チャールズ1世が処刑された「パンケティンハウス」や首相官邸「ダウニング街10番地」、国会議事堂を歩きながら見学した後、テムズ川を下ってグリニッジ天文台まで行き、本初子午線を確認させた。その後、ウエストミンスターまで船で戻って世界遺産「ウエストミンスター大聖堂」や国会議事堂時計台「ビッグベン」前があるネルソン・マンデラやガンジー、チャーチルの銅像となぜそれらが国会議事堂前にあるのかを説明した。その後、ソーホーにあるカール・マルクスが下宿していたフラットまで歩き、翌日は当時、彼が下宿先から大英博物館内にあった図書館まで歩いて『資本論』を執筆したことを体感させるために、大英博物館からミュージカル「オペラ座の怪人」の劇場「Her Majesty's Theatre」まで徒歩で行く様に指示した。

英国研修を経たSMコース院生(中学校社会科)2年目の授業力がどう向上するか、楽しみである。

2019年度・海外学校教育実地研究〈ダラム・ロンドン〉報告

清水 静海

帝京大学大学院教職研究科

はじめに

2019年度の第2回目の海外学校教育実地研究（以下、実地研究）は英国の2都市（ダラム・ロンドン）の現地校等を視察する旅程（2/8（土）出国・2/16（日）帰国）で実施された（[1]表1参照）。なお、ハリケーンや新型コロナウイルス COVID19の影響もあり、当初計画の旅程の一部変更を余儀なくされたが、引率の魚山先生の迅速かつ的確な対応により無事実地研究を終えることができた。ご尽力に感謝したい。訪問先での協議、現地での省察、帰国報告会（2月27日（木））での発表内容などからみて、参加した院生、教員ともどもにおいて充実した成果を挙げることができたと確信している。以下では、ダラムとロンドンに分けて、実地研究での成果を整理する。

1. ダラムでの実地研究

ロンドン到着（2/8（土））の頃、強力なハリケーン（Ciara）が近づいており、ぎりぎり帝京大学ダラムキャンパス（以下、ダラムキャンパスとする）SHOICHI HALL に到着することができた。



SHOICHI HALL 前記念撮影

ダラムでは、SHOICHI HALL 及びゲストハウスに宿泊して、ダラム大学セント・メアリーズ・カレッジの食堂を使用し、ダラムキャンパスの車による送迎、図書司書のピンクス Miki さんの通訳、ダラム

キャンパス校長の今関雅夫先生のご配慮により充実した実地研究が実施でき、厚くお礼を申し上げたい。



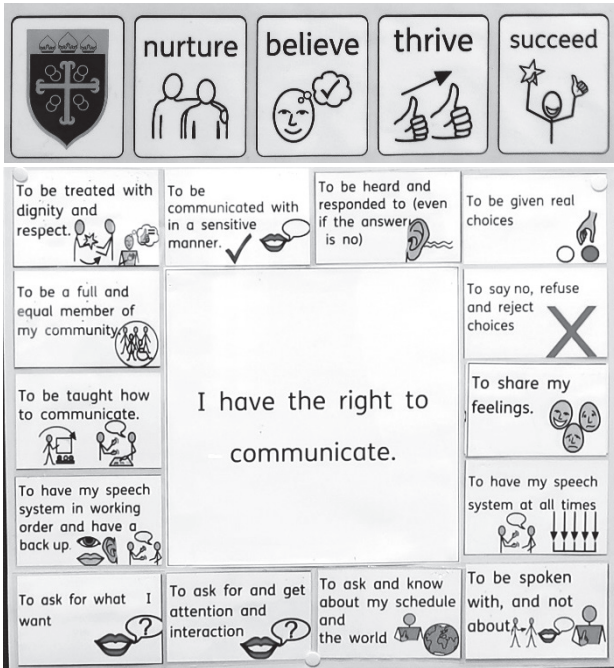
St Mary' s college 正面

ハリケーンの襲来にともない翌日（2/9（日））予定していたエジンバラ行鉄道の運休により、スコットランドの首都エジンバラでの社会教育施設視察は中止を余儀なくされたが、ダラム大聖堂やダラム城などダラム市内をじっくりと見学をすることができた。



St Mary' s college からの大聖堂

3、4日目の2日間で4つの様々な校種の学校、① Durham Trinity School & Sports college（特別支援学校）、② Durham Johnston Comprehensive School（公立中等教育学校）、③ Durham 大学、④ Durham School（私立寮制学校）を視察することができた。①では、School Ethos が次頁のように示されるなど、ピクトグラムを用いた言語環境が整備され、コミュニケーション能力の育成を重視している。次年度より日本の小学校では高学年で英語が教



科書を 用いて指導されるが、参考にできることが含まれているようである。②では、外国語の授業参観と外国語担当の教員の研修場面に同席できた。生徒の授業に向かう澁刺とした姿勢、教師の教育への熱意に驚いた。④では、数学科の統計の初歩についての普通の授業を観察することができた。教室での掲示に、パスカルの三角形についての生徒の自由研究の成果や著名な数学者の数学観（たとえば、A. アインシュタイン：Pure mathematics is, on its way, the poetry of logical ideas、L. クロネッカー：God created the integers; all the rest is the work of man、R. デカルト：But in my opinion, all things in nature occur mathematically）が示され、先哲に学ぶ環境が整えられていた。

③では、今関雅夫先生からダラム及び大聖堂、ダラム城について講義（[2]）を受けるとともに大学の図書館をご案内いただくことができた。講義で



小泉八雲の碑の前で

は、ダラムの位置する北イングランド発の英語、angry、birth、cake、egg、husband などがあること、ダラムは小泉八雲（Lafcadio Hearn）ゆかりの地であること、図書館では、利用している学生が多いことなどに驚いた。また、教授・学習センター（Teaching and Learning center）の見学もできた。

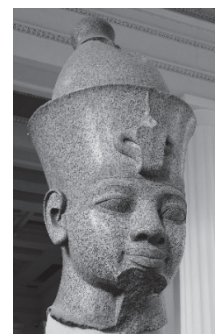


教授・学習センター

センター内にある教室の入口に書かれたいた、2つの文が気にかかった。一つは、“I was never aware of any other opinion but to question everything” (N. Chomsky)。今一つは、“It is our choices that show what we truly are, far more than our abilities.” (J.K. Rowling, Harry Potter & Chamber of Secrets)。

2. ロンドンでの実地研究

ロンドンでは新型コロナウイルス COVID19の影響により帝京ロンドン学園での宿泊が急遽不可となり、学園やその敷地内にある ISCA（ロンドン国際芸術高校）視察もキャンセルとなるなど、現地到着後に大幅な日程変更を余儀なくされた。宿泊は、視察する学校の近くでロンドン中心部へのアクセスのよい場所にビジネスホテル（Park Plaza Hotel）を確保できた。



BC1390 Amenhotep III



BC645-635 ライオン狩り（アッシリア）

6日目は、帝京ロンドン学園訪問・滞在の日程が変更になったため、ロンドン市内の諸施設、大英博物館、ナショナルギャラリーなどを視察することができ



Leonardo da Vinci：岩窟の聖母

た。大英博物館ではBC10世紀以前の古代エジプトの文化、BC7、8世紀のアッシリアの文化に触れることができるとともに、ナショナルギャラリーではルネサンス以前の宗教画から19世紀の印象派の絵画までの変遷をたどることができた。

7日目には、Horsenden Primary School（公立小学校）とロンドン日本人学校を視察した。



エマ校長のプレゼンテーション

前者では、COVID19の影響で授業見学が急遽キャンセルとなったが、エマ校長との質疑応答を通じ、昨今のイギリスの教育の動向について課題を認識する機会を得た。宗主国（旧英国植民地）からの移民を多く抱え、母語（英語）に課題を抱える児童がいること、また、生粋の英国人の保護者やその子供たちにおいてさえも、最近は同様の課題を抱えているとのことであった。帝京大学ロンドン校の卒業生であり、また魚山先生の教え子である偉川さんには、帰国後関連する資料を送付いただくとともに現地校での通訳でお世話になり、お礼を申し上げたい。

また、EU離脱問題、ブレグジット（Brexit）への対応で教育省の仕事が多忙を極め、Ofstedの学校へ対応が強硬になっているとの私見が述べられた（後述）。

後者では、授業参観を行い、石山秀樹校長より海

外における日本人学校の運営について説明を受けることができた。中学校第2学年の数学を小学校籍の教員が担当され、苦戦されていた。理数系で、日本人学校への派遣を希望する教員が少ないことによる苦肉の策であるとのことをうかがい、帰国後、文科省関係者に状況を伝え善処するよう要望した。



ロンドン日本人学校・校舎

ロンドン日本人学校の校舎（アクトン校舎）は、1900（明治33）年に女学校として建てられ、その後ローマ・カトリック系の学校として使用されていた100年を超える歴史をもつ総レンガ造りの重厚な建物であるが、建築後120年を超え、一部老朽化が進み使い勝手が悪くなっているようであった。1987（昭和62）年にアクトン校舎に移転する以前はカムデンに校舎があり、その間の1981（昭和56）年、補習校の巡回指導をする機会（海外子女教育振興財団主催）があり、訪問して日本人学校及び補習校関係者、保護者及び運営委員会関係者と懇談する機会があったことを想起した（[3]）。最初の海外出張で記憶に鮮明に残っている。

日本人学校は、英国において私立学校と位置づけられており、一般の小中学校等とともにOfsted（Office For Standards in Education: 教育水準監査院）の監査の対象になっており、監査で合格できないと運営上厳しい状況になるとのことであった。

3. ナショナル・カリキュラムと Ofsted

(1) ナショナル・カリキュラム

ナショナル・カリキュラムは、サッチャー政権の時、英国病から立ち直るため、教育面で、公立諸学校の教育の水準を高める必要があるとの問題意識で急遽作成することとなり。1988（昭和63）年

教育改革法 (Main article: Education Reform Act) を策定し、ナショナル・カリキュラム (National Curriculum) が1988-1989 (昭和63-平成元) 年に公示された。内容は教科別、キー・ステージ (Key Stage) 別に整理されている。キー・ステージは、1 (age 5-7)、2 (age 7-11)、3 (age 11-14)、4 (age 14-16) の4つに分けられ、達成目標や内容がそれぞれ示された。その後、1994-95 (平成6-7) 年、1997-98 (平成9-10) 年、2007-08 (平成19-20) 年と数次の改訂を経て、現在は、2012-14 (平成24-25) 年改訂に基づいている。

実は、平成元年の改訂の作業を進めている過程で、ナショナル・カリキュラムを作成するための審議会のメンバー数人(フィリップスの社長を団長として)が、1987 (昭和62) 年頃文部省 (当時) を訪問し、日本の算数・数学教育について情報収集に見えた際に対応した。その際のやり取りで、記憶に新しいことが2点ある。一つは、「国際調査で日本は計算力が高いので、算数科の授業では電卓を使っていると思ってきたのに使っていなかった。われわれの訪問に合わせて電卓を隠しているのではないか。」との質問があったことである。今一つは、「日本では新しい基準ができると移行期間を3、4年設けて滑らかに実施できるようにしているのに、サッチャー首相は基準ができた翌年から実施するよう指示している。ひどいものだ。」と述べたことである。

(2) Ofsted

Ofsted は、1989 (平成元) 年に公示されたナショナル・カリキュラムに基づき、キー・ステージごとに、それらの達成状況を評価するための詳しい基準を作ること、それに基づく調査問題を作成し達成状況を評価し、指導・助言をすることを目的として1992 (平成3) 年に設立された第三者による学校評価機関であり、弁護士、会計士、教職経験者、学識経験者などで構成する視学官 (Inspector) で組織され、通常四人でチームを組んで学校を訪問し、学校評価を行う。その上で公教育の成果と質を高めるための報告とアドバイスを行うことを主たる職務とし、教育予算を投入したり削減したりする権限をもっている。

エマ校長より、ブレグジット (Brexit) への対応

で多忙になり、教育省の現場への対応が弱まる中で、Ofsted の現場への対応が厳しくなったり、評価の基準を頻繁に変更して現場へ負担をかけたたりして、現場がゆとりを持ち中長期的な展望をもって教育を行うことが困難になっているとの私見が述べられたことが印象に残っている。

おわりに

今回の実地研究では、現地の学校視察のみならず、ダラムやロンドンでの社会教育施設見学を通じて、院生、教員ともどもに、新たな認識の契機となる問いや疑問に気付くことができたであろう。その解消や解決に向けて、思考が活性化し、これまでの認識を振り返る機会が生まれ、それを改めたり、広げたり、深めたりする機会となろう。

ものごとを考える契機は、基本的に「比べること」から始まる。そこでは、事柄について「受け止めること」と「受け入れること」の二つの営みを明確に区別してかわることが大切である。今回は、日本と英国の対比から、様々な事柄について捉え直す機会が生まれたであろう。その経験を今後活かしたい。

英国出国当日の朝、また、ハリケーン (Dennis) の影響でロンドン市内行きの地下鉄が運行停止となるなど心配の種はあったが、予定通りに帰国することができた。参加者の協力とチームワークの賜と感謝したい。とりわけ、引率者としての的確な判断と適切な対応をさせていただき魚山先生には感謝したい。

最後に、今回の実地研究で成果を上げることができたのは、今関先生はじめダラムキャンパスの皆様のお世話によるものと感謝しています。ここに記してお礼とします。

[参考資料・注]

- [1] 魚山秀介「2019年度・海外学校教育実地研究〈ダラム・ロンドン〉報告」。
- [2] Masao Imaseki, "Durham and Durham University"。
- [3] ロンドン日本人学校「平成31年度・令和元年度学校要覧」。

海外研修報告

～ 制度と経営の視点から ～

中村 雅子

帝京大学大学院教職研究科

1 はじめに

世界遺産の聖堂と城の町 Durham。気品ある美しい佇まいの中に、戦争を乗り越えてきた人々の思いを感じた。宿泊したダラムキャンパスでは、夕食時に多国籍の学生たちが積極的にコミュニケーションを取り合う姿を見た。後半は、ロンドンの工場地帯に宿泊し、経済雇用情勢や移民の進出を肌で感じた。多様な状況を包含するイギリス社会の教育制度と経営に着目した。

2 個性重視の障害児教育

Durham Trinity School & Sports College では、構造化された教室、スヌーズレン、水や触覚の素材、コミュニケーションを促す教材など優れた環境整備がなされていた。授業で調理したクッキーを用いてレストランを開き、客を招き、金銭のやり取りをするなど実物による実践的な学習も行われていた。また、個の興味に応じた選択制クラスを設け、就労と社会的な自立、余暇の広がりへの支援があった。

Special Educational Needs (SEN) は、障害種別ではなく、学習上の困難さに着目し、特別な教育的な手立てを必要とするほどの学習上の困難さがあるなら、その子供は特別な教育的ニーズがあるという捉え方をする。法定評価によるステートメントのプロセスは、教職大学院生の質問もあったため、教師から詳しく説明された。行政当局や学校は、ステートメントに書かれた教育的な手立てを用意する義務があり、保護者が希望した場合は、special school に行くことになるとのことだった。通常の学校の中で、ステートメントはないが特別な教育的ニーズのある子供には、校内の SEN コーディネーター (SENCO)) と手立てを検討するとの説明があった。

教師は共に協議し個別教育計画 (IEP) を定期的に評価し見直す。就学に対して、英国は保護者の意向を踏まえることになっているため、保護者との相談は十分行う。決定に不服があれば SEND 裁判所に申し立てができる。多民族という社会背景の中、均一性より多様性を包含する努力は素晴らしい。

3 GCSE 課程と主体的な学習態度

Durham Johnston Comprehensive School では、言語の授業を参観した。会話重視から文法重視への転換があったようで、授業は講義中心だったが、学生は驚くほど主体的で熱心に学んでいた。Durham School では、数学と理科を参観したが、学生は、ノートに自分の考えを夢中で書くなど熱心で主体的であった。宿題や課題の読書にも熱心に取組む。このような主体的な学習態度は、GCSE の存在が大きいのだろうが、その先にある雇用についての意識が高いためでもあろう。学力だけでなく、学習意欲や探究心などの評価が、就職に影響を与え、自分の将来につながるという自覚をもっている。高大接続改革の進む日本においても、学生に自らの将来を考えさせ、確かな職業観を育む必要があると感じた。

Durham 大学では、24 時間開館する図書館を参観し、学生が熱心に自学自習している姿や図書資料を使ってレポートを書く姿を見た。日本が目指す主体的・対話的で深い学びのその先を考える意義ある海外研修となった。教職大学院の学生たちの質問も研修を深める質の高い内容であった。

2019年度 英国教育実地研修報告

～多文化による教育課題を解決するための公立小学校の取り組み～

蒲 地 啓 子

帝京大学大学院教職研究科

1. はじめに ～民族の多様性～

イギリスでは、DurhamとLondonの2つの街に滞在した。Durhamでは、多くの国からの留学生が、24時間開館している図書館や居心地の良い教育センターで、文字通り勉学にいそしむ姿を肌で感じた。世界遺産の大聖堂と隣り合った城そのものが学生寮であることが物語るように、この街には古くから「学ぶ」という空気が自然に息づいてきたのだろう。Londonは、中心部もまた郊外も、先の大戦のはるか前からの建物そのままに、多様な人種が住むことに驚かされた。わずか1ブロックを隔てると、そこに暮らす住民の様相ががらりと変わる。通りで花を売る子どもたちの姿から、この国の抱える問題が垣間見える。

2. Horsenden Primary School の訪問

小学校は、London郊外の地 Ealing 地区にある公立学校である。周囲には同じ様な作りの比較的小さな住宅が並ぶ。それらの家々に住む人々の多くは移民であると聞く。よって、この学校は多くの移民による多文化が特徴である。現校長の赴任前は、言語能力や社会的スキルの低下によって、かなり「荒れた」学校であったようだ。特に、子どもたち（保護者も含めて）の英語のレベルは学年に関係なくバラつきが大きく、学習はもとより、学校との意思疎通が上手にとれない家庭も多いとのことであった。

イギリスでは、オフステッドの評価が学校選択の目安とされる。監査対象は、学習達成度や学力だけでなく、授業への意欲や積極性等の子どもの能動的態度、教師の指導や教育の質、教育課程の内容等である。差別への取り組みや地域社会との連携性など、多岐に渡った項目があり、校長はこの評価に心

を砕く。今回訪問したいくつかの学校でもこの話題が出され、経営者のリーダーシップが問われていると感じた。

この学校では、併設された子どもセンターを校長があわせて管轄し、3歳から小学校入学までに、遊びを通して話しながら語彙を増やす等の活動で言語能力の伸長を図っている。校長によれば、生まれる前から子どもの家庭の状況を把握しているという。移民が多いこの地域で、子どものいる家庭への福祉的な支援は欠かすことができないものであろう。

子どもセンターの取り組みによって、子どもの入学時にはその家庭背景や発達状況や特性までを学校が把握しており、入学後の教育のプランに役立てている。また、数の多いインドやポーランドの文化を教える等、子ども・保護者・地域と話し合いを重ねながらカリキュラムを整備している。子どもたちのアイデンティティを大事にしながら学習意欲と学力の伸長を図っている。

校長は、教員や保育士、PEやSSW等の教育と福祉の専門スタッフを統括し、学校課題を解決するべく経営をしている。予算も含め大きな権限をもっているであろうことは大変興味深い。校長のパワーにあふれた説明にはそこへの自信が感じられた。

但し、特別支援教育については、6%の子どもたちは他の学校を選択したため本校にはいないという。また隣接の特別支援学校との交流は特に行っていないという説明は少なからず残念であった。

ホーセンデン小学校のカリキュラム強化

鈴木 康 仁

帝京大学大学院教職研究科

1. はじめに

今回参加した海外学校教育実地研究の研修地であるイギリスは、私にとって初めて訪れる国であった。以前からイギリスへの憧れがあり、「ニュートン、ダーウィン、ジョンレノン」がすぐに思い出される。彼らが生まれた国の教育がどのような風土から生まれたのかということに興味をもっていた。歴史ある文化や伝統を守りながらも、常に流行の発信地としてファッション・アート・音楽・考え方や技術などを生み出し、世界中に発信する国を訪問することに大きな期待をもって参加した。

2. ホーセンデン小学校訪問

今回の研修では、様々な学校を訪問することができたが、その中からホーセンデン小学校（公立校）の様子について報告する。この学校には、3歳から11歳までの多国籍の子どもが通学する、日本で言えば幼稚園と小学校の一貫教育校というイメージである。施設の特徴としては、イギリスの小学校にはプールのない学校がほとんどであるが、この学校には敷地内にスイミングスクールがあった。放課後に有資格の水泳教師が有料で指導をしているようである。イギリスでは学業カリキュラムのしわ寄せの為に、学校での水泳授業が少なくなっており、国としても水の事故が増えていることが大きな課題になっているようである。

学校全体のカリキュラムについては、保護者と運営団体、教師が協力して創っており、学校の独自性が発揮されている。特徴的なカリキュラムとして、「カリキュラム強化日」というものがある。一日かけて、児童がテーマまたは主題をより深く探究する機会として設定されており、通常の授業とは異なる活動である。普段取り組むことがない創造的な活動

や課題に没頭しながら、プラスαのスキルを身につけるように工夫されている。多くの場合、異なるクラスまたは異なる学年のグループの友達と一緒に学習するようである。例えば「いじめについて」や「シェイクスピアについて」などがテーマとなる。同じテーマまたは主題が学校全体で設定されているため、学習内容を児童と家族が共有したり、異なる学年のグループで結びつけたりして、学んだことをさらに深めていくようにしている。このような学習は、日本でも取り組んでみたい活動である。児童が主体的・創造的に取り組み、学んだことを仲間と比較・検討する学習は、将来にわたって学び続けるスタイルを確立させるためには大変効果的である。「主体的な学び」については日本でも重視されているが、もっと大胆に「子どもが自ら創造的に学ぶ」学習へと授業の重みを転換していくことが重要であると感じた。

3. おわりに

地下鉄やバスを利用してロンドンの街を歩きながら人々の様子を観察した。地下鉄では、スーツを着たビジネスマンが女性にサッと席を譲る姿をみて、さすがレディファーストの国であることを感じた。また、ロンドン塔から大英博物館までバス移動した時には、いろいろな人に道を尋ね、街の人の温かさを実感することができた。バスの運転手が「このバスでは博物館に行けない」と言った時、周りの人がそれを聞いていて、何人かの人が行き方を教えてくれた。見ず知らずの人とのコミュニケーションに長けているのも国民性なのかと思う。バスを降りるときには乗客の一人が声をかけてくれ、大英博物館まで一緒に案内してくれた。大変感謝している。

【Trinity School】

ダーラムトリニティスクール アンド スポーツカレッジ

安藤 拓也 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

1 学校基本情報

2～19歳を対象とした学校で全児童、生徒を合わせると230人が在籍している。それに対して、25人の教員、50人のスタッフ。外部のアシスタントを含めると約130人で学校運営にあっている。

自閉症または重度、中等度の複雑な学習困難を抱える児童、生徒を教育する専門学校である。一部の生徒には、医学的、身体的、感覚的、言語的、または行動上の困難もある。ダーラムトリニティスクールアンドスポーツカレッジではすべての生徒に対して、教育ヘルスケアプラン (EHCP) がある。

ダーラムシティセンターの郊外に位置しており、比較的新しい教育目的をもっている学校である。生徒は、ICTスイート、感覚室、ハイドロセラピープール、デザインテクノロジールームなどの専門室や施設で教育を受けられる。学校は子供たちがカリキュラムを通して、彼らの興味と彼ら自身も持っている強さで成長することを可能にするためにアウトドアプレイアンドラーニング (OPAL) エリアを開発している。

2 OPAL (オパール)

屋外での遊びと学習のことを指している。トリニティスクールでは、遊びを改善することで、身体活動、社会化、協力、調整、回復力、創造性、想像力、楽しみの機会をよりよくするプログラムを行っている。

オパールアウトドアプレイアンドラーニングプログラムは、17年間の250を超える学校でのテストにより開発されたものである。現在、カナダとニュージーランド、そしてイギリス全土で実施されている。スロバキア、チェコ共和国、ハンガリー、ポーランド、オーストリアの学校でもプログラムを適応させる活動が開始された。このプログラムは、優れた教育を通じて学ぶだけでなく、子供たちが遊ぶ時間も学ぶという考えに基づいており、学校での時間の20%が遊び時間である。

学校がこのプログラムを実施している理由の1つは、子供のおかれている環境の変化である。現在は多くの子供が遊びの必要性を満たせなくなっている。OPALプログラムを実施する学校では多くの利点を実証されている。学校の楽しさの向上、子ども同士の争いで失われる授業時間の短縮、事故の減少、行動の大幅な改善が見られている。

遊びの中で子供たちは教師が教えることができないことをすべて学んでおり、成長する中でその楽しさに気付くことができると考えられている。

3 教育目標

- ①生徒は個人として認識され、個人のニーズは満たされます。
- ②生徒の学習は楽しく創造的でやりがいがあります。
- ③生徒は学問的、感情的、社会的にサポートされています。
- ④生徒はスキル、コミットメント、回復力を身につけ、成功し、自信を持ち、バランスの取れた、自立した生涯学習者になります。
- ⑤生徒は、他者の寛容性を高めながら、ポジティブな関係を築きます。

4 訪問調査の記録

(1) 学校の様子

閑静な住宅街の中にある落ち着いた雰囲気のある学校であった。もともと近隣にあった3つの学校が統合してできた学校で充実した設備が整っていた。年齢が低い児童の教室にはその教室用のテラスがあり、そこで遊ぶことができる。多動の児童や常に教師にとって目の離せない児童がいる場合にも安心して外遊びができるようになっていた。校舎の外にある遊具や勾配や芝生にも自然が感じられるように工夫が施されていた。美術、図工的な学習を行う教室には児童を安全な形でぶら下げられる器具も天井に設置されており、両手、両足を使った作品作りも行えるようになっていた。イギリスには珍しいプールもあり、1年中水中での活動やセラピーが行えることも

学校の特徴であった。家庭科室もあり自分たちで計画を立てつつ、お菓子作りを行う様子が見られた。作ったお菓子などを販売したり、喫茶スペースで地域の人を招いてイベントを行えたりする機会も作られているとのことだった。専科教室特別教室も複数ありブラックライトを効果的に使って感覚を刺激する教室や気持ちを落ち着かせるための教室なども設置されていた。また、いくつかの教室にはテント型の個人スペースが用意されていた。廊下にはメデイシンボックスが用意されており、薬を保管したりある程度の医療行為が行えたりする。

教員と児童、生徒の割合は6人の子供に対して2人の教員を配置することを基本としていたが、場合によっては児童1人に対して2人の教員がつくこともあるという。また、フォーマルクラスとセミフォーマルクラスも2年前から設けられたとのこと。一定の教育課程の計画の中で授業を進めるクラスとそれに近い進めた方をするクラスであり、児童、生徒に合った形で学習が進められるようになっている。

イギリスの小学校には珍しく、給食がある学校で全児童、生徒、教職員の食事を自校で用意することとなっている。アレルギーについての対応もされており、日本との共通点を感じられた。

(2) 児童の見取りと進路

児童の個人情報や成長は一つのファイルに整理されており、それが教室の後ろに置かれていた。それがそのまま引き継ぎの資料の一部となるという。その児童のバックグラウンド、取り組み内容についての目標、学び方、コミュニケーションの取り方、社会性、メンタル、五感、食事、フィジカルについて分かるような資料になっている。ファイルの内容は毎年更新することになっており、保護者を交えて作るようにしている。

また、学校での見取りは春と秋にミーティングを行い確認している。アセスメントとしてタブレットで写真を撮り児童の変化が目で見えてわかるようにしている。個人内での変化に気付けるようにすることを大切にしていた。

卒業後は地元の大学に進学するか、特別な支援を受けられる学校に行くかの選択になる。



5 まとめと感想

特別支援学校の運営の仕方としては日本との共通点を多く感じた。保護者からのニーズや多くの職員の異動、子供たちの障害程度の違いなど、取り組むべきことが似ていることも理解できた。その中で両国とも児童、生徒の可能性を最大限引き出せるような工夫と努力を行っている。日本との大きな違いとしては、学校裁量で職員が確保できる点だと考える。イギリスにおいては、学校ごとに予算の配分が違う。特別な支援を必要とする児童、生徒の障害程度により政府から提供される予算が変わる。そして、提供された予算の使い方は校長にゆだねられる。人件費に多くを割こうと考えるのか、施設を充実させるのかを校長が決められる。そのため、職員の数を可能な限り増やすことができる。そうすることでより手厚い指導、支援が可能になる。一方で厳しい監査が行われるため、それをクリアすることが第一条件ではある。

トリニティスクールは学校として2歳の時期から子供たちと関りがもてており、幼少期からの児童理解は子供の成長において大きな意味をもつと考える。

最後に実際にイギリスの特別支援学校を見学したことで、うらやましさを感じた部分もあったが、似ているようなシステムの中で日本の教員もイギリスの教員も同じように児童、生徒のことを思い頑張っている現実を目にすることができて本当に良かったと思う。これからも日本だけでなく、世界の教育に対してもアンテナを張り、自分の励みにしたり自分の取組を振り返ったりする機会を積極的に作っていききたい。

【Durham Johnston Comprehensive School】

ダラム・ジョンソン・コンプリヘンシブ・スクール報告

石川 真理代 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

1 学校基本情報

ダラム・ジョンソン・コンプリヘンシブ・スクール (Durham Johnston Comprehensive School) はダラム市にある男女共学の公立学校である (所在地 Crossgte Moor, Duham, DH1 4SU)。11歳から16歳まで (Key stage 3 (11～14歳) は year7～9、Key stage 4 (14～16歳) は year10、11に相当) の義務教育段階と、義務教育終了以降の2年間について、大学への進学準備を兼ねた学校であるシックスフォーム (Sixth form (16～18歳) は year12、13) を併設する中等教育学校 (Comprehensive School) である。

1901年にスーザン・ジョンストンの遺志により資金提供され開校した。初年度は13名が入学し、男女共学のグラマースクールとして開校したが、その後テクニカル・スクール、ジョンソン・グラマー・テクニカル・スクール (The Johnston Grammar Technical School) 等と時代の変遷をたどり、現在に至る。1950年からシックスフォームを開設し、開設初年度は34名の男子生徒が入学した。

学校ウェブサイトには行動指針 (Behaviour)、キャリア教育情報とガイダンス (CEIAG)、Charging and Remissions、コンプライアンス (Complaints Procedures)、内部告発 (Confidential Reporting Code (Whistleblowing))、家庭との連携 (Home/School Partnership Agreement 2019-2020U)、安全保障 (Safeguarding (Child Protection))、特別支援教育 (SEND)、制服 (Uniform Policy 2019-2020) 等における各条項を学校ウェブサイト上で公開している。特別支援教育コーディネータ (SENCO) の氏名も公開されインクルーシブ教育の充実が図られている。学校と家庭、地域との連携や生徒の学校生活について情報を一般に公開している。

2 訪問調査の記録

(1) 学校方針

第3代ヘッドティーチャーによる5つのコアバリュー「5 core values」が次のように示されている。学術の卓越性「Academic Excellence」知識の習得「Acquiring Knowledge」社会正義「Social Justice」社会貢献「Public Service」世界に開かれた機会「Global Opportunities」。ここに示された内容は現在も大切に引き継がれており、現ヘッドティーチャーは更に「問い」を付け加えている。教員研修等でこの言葉と「問い」を教師へ投げかけ、常に学校教育の改善に意識を向けられるように工夫をしているとのことである。

(2) 学校の様子

現在、在籍生徒総数1666名の大規模な公立中等教育学校である。義務教育段階の生徒数は1317名である。この数字から判断すると、義務教育段階では各学年およそ220名、シックスフォームでは各学年およそ175名と推測できる。また、昨年度の義務教育段階の入学志願者数745名で、セントラルエリアの公立学校ではトップであり、中には学区外からセントラルエリアへ転居して応募してくる家庭もある。今年度のシックスフォームの入学募集人数は50名であることから、内部からの進学者はおおよそ125名であると推測できる。生徒は上下黒のジャケットとパンツまたはスカートに白のシャツ、ネクタイを制服として着用し、言語授業は1単位時間あたり60分となっている。

(3) 施設の様子

原色を鮮やかに使用している校舎外壁と、白を基調としている校舎内のコントラストが大変美しい。防犯対策として、受付で記名し、ネックストラップを受け取り校内ではストラップを身に付ける。職員室の扉にはセキュリティーカードをかざす機械があり、生徒が自由に出入りできない仕組みになっている。また、大規模公立学校のため昼食の時間は45分

間ずつ2回に分けることでカフェテリア等の混雑を緩和している。時間割をずらしているためノーチャイムである。また義務教育段階とシックスフォームとで、使用する校舎が異なる。シックスフォームは大学受験に向けた学習環境が充実している。

(4) 授業観察の記録

昼食を挟んで午前と午後に、語学（フランス語、ドイツ語、イタリア語、ラテン語）の授業を参観した。言語学習の教室では、スペイン語、フランス語、ドイツ語、中国語、ラテン語のいずれかの専門教室に分かれている。見学したクラスは30名ほどの生徒が学んでいた。各教室正面には教卓とホワイトボードがあり、ICTの設備が充実していた。教室内の掲示板には各言語にちなんだ写真や絵、単語、出席状況調査表、休憩時間中の授業や生徒活動一覧表等が掲示されている。教室後方には、貸し出し用教科書や授業資料があり、生徒が自由に使えるようになっている。各授業は、通常、試験による成績によってクラス分けが行われている。更に教師によって設定された指定席で、成績の近い生徒同士学び合えるように十分配慮して授業環境を整えている。今回参観した言語授業では教師の用意した資料と指定教科書、筆記用具を用意して生徒は学習していた。特にyear11では数か月後に迫っているGeneral Certificate of Secondary Education (GCSE) 対策を行っていた。教師は評価表を生徒に示し、生徒は各自が記述した文章を読み解きながら自己評価している場面がみられた。またラテン語では教科書を使用させ、ワークシートやスクリーンに映し出される補助資料等も活用しながら授業展開していた。語学は選択科目であり、year8で2言語選択履修した後のyear9では、2または1言語の履修変更ができることで生徒は大変主体的に学習に取り組んでいた。

ところで、言語学習の主軸はこの10年間で文法的に正しい文章を書けるようになるとともに、文章を読んで論理的に考える力を育成することに移行しているとヘッドティーチャーは語っていた。また、試験では、記述式問題と選択式問題を併用し、客観的な評価ができるようになっているとのことである。試験方法について、教師は常に最新の情報を集

めて教科間で共有し、指導を行うとのことである。

3 学校調査と学校改善

第三者機関による学校調査(Ofsted)は2015年に実施されており、ここでは全ての項目で最も良い評価(Outstanding 1)を得るとともに、「This is an outstanding school.」と絶賛されている。特に「The headteacher, senior and middle leaders and governors provide outstanding leadership.」と評価を受けていることから、前ヘッドティーチャー等による学校改善の成果は大変大きかったものと判断できる。2015年と2011年の学校調査と比較すると、評価内容に変更があるとおりに、調査内容は毎回異なるとのことである。そのため、学校の教育課題を抽出、解決するとともに、最新の教育情報を得ながら、学校経営を行うことが大変重要であることを知った。

現ヘッドティーチャーは、教員研修(Teachers' training)を勤務時間の中に位置付けてほぼ毎週、定期的実施することで、指導方法や教育方法等を改善するとともに、教科内と学校全体とで互いに相談し合える職場の雰囲気醸成することに努めている。このようなヘッドティーチャー等のリーダーシップによる教育改善は2011年の学校調査でも高く評価されている。そのため、現ヘッドティーチャーは教員研修を継続実施することで、教員の更なる指導力の向上を目指すとともに、職員集団全体としての指導力の向上を目指すことで、各生徒の才能を伸ばし、更に良い教育環境を築いていることを知った。こういった取り組みが、延いてはGCSE、GCE Aレベルにおける生徒の優れた結果や、卓越した進学実績へと導いているものと判断できた。そのことが、地域保護者の良い評価にも繋がり、入学応募者数の多さにもあらわれ、学校全体で良い循環が構築されているものと思う。

主要参考文献

- 1 The national curriculum in England ,Framework document,December 2014
- 2 Ofsted , School report (retrieved 2020.2.26 <https://files.ofsted.gov.uk/v1/file/2459829>)
- 3 Primary and Secondary School Admission Guide for Parents/Carers 2021 ,p.55

【Horsenden Primary School】

地域の公立小学校

安藤 拓也・小松 千草 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

1. 学校基本情報

学校名 : Horsenden Primary School
電話番号 : 020 8422 5985
電子メール : admin@horsenden.ealing.sch.uk
所在地 : Horsenden Lane North, Greenford,
Middlesex, UB6 0PB

児童の実態: 就学前教育 (3歳~4歳)、レセプション (4歳~5歳)、初等教育 (5歳~11歳) を担い、933人の子どもが通う (2018年時点)。インド系、パキスタン系、ポーランド系が多く、他にも多様な人種が所属。71%の子どもたちが、英語を第二・第三外国語として話す。

学校の特色: ロンドンのイーリング地区の中では規模の大きな小学校である。子供が生まれる前から地域社会や保護者にサービスを提供する子どもセンターがあること、室内プールを所有し放課後や週末に他校の子供に水泳のレッスンを提供して収益を得ていること、隣にある特別支援学校と敷地を共有していること等が挙げられる。

教育改革: 現在の校長は昨年9月から赴任しており、前任の校長は在任期間が25年であった。現在の校長は子供への教え方のアプローチが時代遅れであると感じており、現在、改革に取り組んでいる。

2. 教育目標

すべての子供に無限の可能性を抱くことにより、希望を高めている。すべての子供が個人として評価され、現在および将来成功するために必要な学問的、個人的、社会的、感情的なスキルと特性を開発するためにサポートされる環境を作っている。

3. カリキュラム

自分の興味を探求し、自分の周りの世界に興味を持つ、野心的で批判的な思想家になるように子供た

ちを育てることを目指している。カリキュラムは、子どもたちが学習に責任を持ち、学校や大学、仕事や人生を超えて成功するためのスキルとキャラクターの美徳を養うことを可能にするために計画している。数学、英語、理科、体育など様々な教科があるが、Curriculum Enrichment (カリキュラム強化)、日本でいう総合的な学習の時間に近いものも行っており、子供がテーマまたは主題をより深く探求する機会を提供している。子供は、通常の日常的な学習とは異なる創造的な活動や課題に没頭しながら、スキルを身につけることができる。

読書を楽しんでいる子どもは成績が良くなるといった調査結果から、生徒が正確に解読し、読書への愛情を身に付けられるよう、Read, Write, Inc. のフォニックスプログラムを通じて学ばせている。

また、水泳、料理、音楽、カリキュラムの日、旅行と訪問、放課後クラブなどの特色ある取組も行っている。

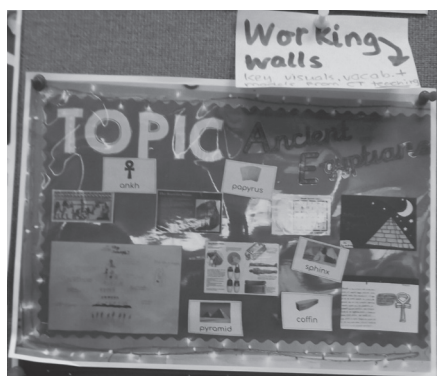
4. 授業

国際的な調査結果をもとに、子どもが学びやすい教え方を脳の構造から分析するなど教育方針を自分たちで開発している。最近では、議論や体験や思考過程に着目した授業形式であるアクティブラーニングに着目しており、積極的に取り入れている。また、ビジュアルラーニング (目に見える学習) の導入を促し、例えば「Working Wall」と呼ばれている紙を教室の様々な場所に貼って、そこに結論だけではなく、その結論に至った理由や思考過程を書き込むことにより、子供の考えを「見える化」する。あるいは、授業の終わりに、当該授業の達成度を「見える化」するため子供と教員に、効果測定シートに記入させ、ノートに貼り付けるといった取組を行っている。

5. 評価

1年生は6月に、解読能力を評価するフォニックスの全国スクリーニングを受ける。その結果により、習熟度別で学習を進める。

また、毎年5月には、2年生全員が読解と数学の国家試験を、6年生全員が読解、数学、文法、句読点、綴りの国家試験を受ける。



6. 教師の研修システム

この学校で求められている教師像は、インスピレーションと情熱を有し、フィードバックを受け入れてくれる反射的实践者であり、子どもへ真の関心がある人物。協調性があり、魅力的で共感的、研究に関心がある教師である。また、英語、数学、ITスキルは必要であると話す。

しかしながら、近年、教師を希望する者は減少傾向にあり、特にこの10年は厳しくなっている。英国の教育プログラムでは、採用されてすぐに実践できるような十分な準備ができていないため、新しい教師を採用するとき、導入プログラムとサポートを必要とする。

研修システムとしては、事前にサポートスタッフとしてトレーニングしておく場合や、新規採用者は、最初の年にメンターとの定期的なミーティング（コーチング、メンタリング）、持ち授業量が削減されて授業参観やトレーニングに充てられる等の配慮がある。それ以外にも、他校と連携し、情報交換、交換研修等を行いながら、日々授業力を磨いていく。個人的に学びに行く機会も推奨されているのだ。

7. オフステッド

この学校は近年改革を進めているからか、Ofsted

の評価を強く意識している印象を受けた。Ofstedとは、Office for Standards in Educationの略で、イギリスの教育水準監査局の呼び名であり、教育技能省から独立した準政府機関に属し、学校の教育充実度の指針となっている。

監査項目は多岐に渡っており、生徒や教師の学習に関することや態度・質、学習設備からトイレに至るまで、学校設備もチェックされるという。監査の結果は公開され、オンラインで全世界から検索・閲覧することができるため、次年度以降の入学希望者数にも大きな影響を与える。この学校は2014年の監査では、リーダーシップと管理、生徒の行動と安全、教育の質、生徒の達成、初期の準備など、どの項目でも「良い」の評価を得ているが、評価の規準が変わったり、求めるものが変化したりしていることから、教員へのプレッシャーも大きいと話していた。

現在、Ofstedは学力や試験の結果よりも、カリキュラムに重点を置いているということで、この学校としても、子供たちにとって価値ある教育を推進していこうと力を入れていることが分かった。

8. まとめ

コロナウイルスの影響で、今回の訪問では校内の様子や児童、授業の様子をみることはできなかったが、校長先生がプレゼンを用意し、熱心に教育方針や指導方法についてお話し下さり、学校を変えていく時に何が重要なのかについて考えることができた。それは大きく2点、カリキュラム開発と教師教育に絞られていたように思った。そして、その実現には綿密な計画と連携が必要であることも分かった。

Ofstedの話がよく出てきていたが、その評価や改善案を受けつつも、校長先生が目指す児童像、教師像をしっかりともち、どうしたらそれを実現できるのかに情熱を注ぎ取り組んでいることがよくわかった。現状がどうか、どう評価されるのか等、客観的な視点も大事だが、それは、過程であることを理解し、その評価を受けて、どうしていきたいのかを考えていくことの方が大事なのだと学んだ。

【ロンドン日本人学校 The Japanese School in London】

イギリスの日本人学校

小松 千草 (帝京大学大学院教職研究科 スクール・リーダーコース)

1. 学校基本情報

学校名 : The Japanese School in London
電話番号 : +44 (0) 20-8993-7145
電子メール : ron-nichi@thejapaneseschool.ltd.uk
所在地 : 87 CREFFIELD ROAD, ACTON,
LONDON, W3 9PU, U.K.

学校の特色 : ロンドンの日本クラブ会員日系企業運営の「日本人学校有限会社」により「全日制の義務教育学校」として設立され、日本の文部科学省により認定された在外教育施設であると共に、イギリスの教育省より認定を受けた「私立学校」である。小学部と中学部からなる。

教育課程 : 文部科学省の定める学習指導要領に準拠しつつ、在外教育施設としての特色を加味したカリキュラムによって構成されている。

教員 : 文部科学省によって派遣された「派遣教員」、現地ロンドンにおいて採用された「現地採用教員」、そして英会話を担当する「英語・外国語 B (英会話) 講師」からなっており、各教員の指導力を生かした多彩な教育が可能となっている。

教科書 : 日本において検定を受けた「教科用図書」(いわゆる教科書)を使用している。

財務 : 日本国政府の補助金と、在校生から徴収する入学金・授業料によって運営されており、この面に於いてはまさに私立学校である。

経営 : 日本人学校有限会社により行われ、その下に設置されている学校運営委員会が実務的な運営を行っている。

2. 日本人学校の需要

児童生徒数は、日本経済の高度成長の波に乗って増加の一步をたどり、一時は 1000 人を越えたこともあったが、その後の経済状況の後退とも相まって減少の一途をたどり 300 人台まで減少した。児童

生徒数の減少は学校の財務状況の悪化と直結することから魅力のある学校づくりや児童生徒数の予想をたて、財務の健全化を図るべく、授業料の計画的な改訂と教員・事務局職員の削減を行ってきた。ここ数年、児童生徒数は、350 名台で推移しているが、経済の動向を受けて今後も減少することが予想される。また、昨今、海外に赴任する保護者が、異文化理解や英語での教育を求める傾向にあり、現地校や英語での授業がほとんどを占める国際学校を選択する割合が増えてきている。さらに、日本人学校出身者では出願できない英語での帰国入試枠ができるなど、国内の学校の帰国子女の受け入れ態勢が整ってきたことも現地校や国際学校を選択する理由の一つとなっている。

3. 教育の特色

日本と英国の認定を受けた教育施設として、特色ある学校づくりを目指し、幅広い教育活動を展開している。主な特色ある教育活動は、

- ・ ロンドンタイム (総合的な学習の時間)
- ・ 現地校交流
- ・ 英語・外国語 B (英会話) 授業 (小学部週 3 時間、中学部週 2 時間)
- ・ 運動会
- ・ 修学旅行 (小学部 6 年 北ウェールズ 中学部 2 年 スコットランド)
- ・ 自然体験教室 (小学部 5 年 イングランド西部)
- ・ 写生大会
- ・ 職場体験学習 (中学部 2 年)
- ・ 進路講演会等

4. 学校経営の重点

- 「自立」を目指した「確かな学力」の育成
- ・ 教育活動の土台となる「読み・書き・文章力」の育成を全ての教育活動で実践
- ・ 「気づき・考え・疑問点」を文章化するノート指

導等の実践

- ・文章力の向上、知識・情報収集の手段として、図書の利用・読書活動・ICT 機器の活用
- ・英国・ロンドンに立地する地の利を活かし、コミュニケーション能力の向上を主眼とした英語・英会話授業実践の充実
- 「貢献」を実現させる たくましく、国際社会につながる力の育成
- ・「貢献」「すすんでかかわる・たくましく」の実現を目指した「考え、議論する道徳」の授業実践
- ・学校行事の精選と充実
- ・児童会・生徒会活動の活性化及び異学年交流の充実
- ・進路指導・キャリア教育の充実
- ・体育・健康教育の充実
- 信頼される学校づくり
- ・安全・安心な教育環境整備
- ・「自分の命は自分で守る」視点を踏まえ、大使館等関係機関との連携による避難訓練実施を通じた危機管理意識の高揚
- ・組織的・効率的な校務運営の実現
- ・大使館をはじめとした関係諸機関・地域諸機関との連携
- ・公式サイト・blog 等を通じた情報発信

5. 授業の実際

(1) 英会話



英会話の授業では、読む・書く・聞く・話す能力に向上に努めている。ICT を用いた授業も行っており、テンポよく、児童も活発に発言しながら学習が進められていた。英会話講師は現地採用されており、レベル別で、上位 A,B,C は外国人教師、D は日本語を話せる教師が教える。(1 クラス 5～10 人程度、週 3 時間) テキストもレベル別になっており、教科

書とは別に市販されているものを使用していた。

(2) 日本での進学を見通して

学習指導要領に準じて授業を行っているので、日本の学校の授業と変わらないが、そこはイギリス。校舎内の掲示物、行事、教室掲示等は、意図的に日本の伝統や文化を取り入れられるように工夫されていると感じた。また、図書室の利用を促し、読書量を増やそうともしており、日本に戻った時に困らないような学力を身に付けるということ意識していた。

6. 課題

校長先生をはじめとして、熱心に教育活動の充実を進められていたが、現在、① Ofsted の評価に対する改善、② 教員の連携、③ 資金不足、等が課題と話していた。2014 年の Ofsted による報告では「改善の必要な学校」という評価が下されており、リーダーシップ、運営管理、教授の質、学生の業績については改善の必要があるとされた。実際、教員不足や派遣教員と現地採用教員、講師等の連携難、資金不足による校舎の修繕難等の現状もあり、課題を解決するために取り組まれていた。

7. まとめ

日本の文部科学省により認定された在外教育施設であると共に、イギリスの教育省より認定を受けた「私立学校」という点に、学校経営の難しさを感じた。学習指導要領に準じて教育を行うが、それをイギリスの教育観 (Ofsted) で評価される。また、教員の研修機会は個人に委ねられており、現地採用と派遣教員との意識の違いも大きい。校長も派遣されて来て、また数年で入れ替わる。教職員が一つになり創造的に教育に取り組むには、システムが整っていることが大きな要因であることを感じた。

【ダラム・スクール durham school】

私立寮制学校〈パブリック・スクール〉

石井 祐作 (帝京大学教職大学院教職研究科 教職実践高度化コース)

1. 学校基本情報

学校名 : durham school
電話番号 : + 44 (0) 191 731 9270
電子メール : <https://www.durhamschool.co.uk/>
所在地 : Quarryheads Lane durham DH1 4SZ



地域の特徴：ダラムは、世界遺産のダラム大聖堂、ダラム城、またダラム大学が中心となった学生が多く在住するイングランド北部の地方都市である。街の印象は非常に落ち着いており、象徴であるダラム大聖堂のキリスト教に基づく精神が根強く、人々にも道徳心が備わっている。

生徒の実態：3歳から18歳まで幅広い年齢層の学生がダラム・スクールに所属しており、お邪魔した高等部では、およそ300人が通学しており、100人が付属している寮での生活を行っている。そのうち50人が中国、ドイツ、アメリカなどから留学しており、近年は、中国からの留学生が増えており、中国人だけのコミュニティが出来てしまう問題があるが、寮生活での問題点は皆無であるとのことである。寮生活では、サポートスタッフが3人在駐しており、共に寝食を共にしている。

校内設備：校庭には芝生が綺麗に整備されている。説明によると1815年に整備されたもので冬はラグビー、夏はクリケット場として使用されているようである。ラグビー場としては、世界で4番目に古いということからラグビーが持つ歴史の深さを感じさせられた。また敷地内の一番高い場所に

教会が置かれており、ダラム大聖堂のように象徴として、キリスト教の教えを基盤とした教育が行われていることが実感できた。また私自身、「宗教は危険なものである」と思っていたが、ダラム・スクールやダラムの街の様子を見ていると、「宗教が人々の道徳心を保つのに一役買っている」と気づくことができた。

2. 教育方針

①コミュニティ面

- 生徒個人へのケアによって自身の才能の開発へのサポート
- 個々を豊かにする協働的学習の機会の促進

②伝統面

- 大聖堂の教えを基盤とした他人尊重の精神
- ダラム大学との連携

③学習

- 生徒が成功体験を味わえるように体験を重視
- 全ての学習に跨った包括的学習課題

④再生

- 多様なプログラム（スポーツ・学習などでの自身の能力開発
- 生徒間での競争で失敗と成功を学ぶ機会の提供
このように個別支援、協働的学習、体験活動重視、包括的学習課題の提供などは、昨今日本の教育課題として、常日頃から言われているが、日本の教育界の源流はここにあると思わされた次第である。また人格形成期の生徒の能力開発に力を入れ、自己肯定感を高めさせて、送り出すという意向が見える。これを受けて、

- 科学や数学、識字に力を入れ、早期からの読み書きと数学的スキルの開発
- 歴史、地理、ICT、アート、仏語、音楽、体育の重視
- 放課後のクラブ活動はモダンダンス、空手、テニス、スピーチを重視

に力を入れている。

3. 教員採用、研修

資格（所持していた方が望ましい）、模擬授業、校風に合う人材か、生徒の世話ができるか、受け持つ教科がイギリスで言う A レベル相当のもので大卒か、教職員免許（あれば望ましい）などを加味して、採用するのかを校長が決定する。新卒や異動してきた教員は2年に1回採用するかというかなり狭き門である。また採用されたとしても、新人研修が控えており、担当教員が1年を通して学校に合う人材かどうかを見極めるとのことである。

また校内研修については、他の教員の授業視察、海外から留学している生徒の対応、学力に課題がある生徒への対応、外部研修といった様々な研修が存在し、それぞれの専門分野に応じた教師教育を行っている。これらの点は、日本と同様の様子が見える。

4. 進路

ロー・スクール、各機関の医学部、オックスフォード、ケンブリッジなどの難関と呼ばれる学校を目指す生徒については、人生経験やその過程を入学審査で強く求められるため、職場体験などといった体験活動を通して、人生経験を満たせるように指導している。これら以外の大学に関しては、A レベル相当で入学することが基本的に可能である。しかしこれらの大学の試験でも専門性が求められ、専門知識についてインタビューされるなどといったことから、コミュニケーション能力を向上させていくことが必須であるとのことである。

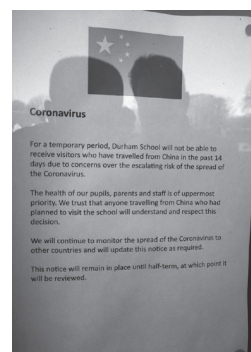
オックスフォード、ケンブリッジを受験する生徒数は年間おおよそ85人在籍している中で15人程度であり、この15人で2人ほど合格すれば良いとのことである。「最近はこれらの難関大学は、公立卒をかなり優遇しているのでは」というのが説明して下さった先生の見解である。また視察でお邪魔したダラム市内にあるジョンストン・スクールを進学実績の面でかなりライバル視しているようで、学生が質問した際には、何とも言えない顔で説明して下さったのが印象的である。

5. 連携

近隣にあるダラム大学とも授業で連携することが

あるようで、ダラム大学の講師による出前授業が行われている。この授業は希望制であるものの大学レベル相当の内容を扱うため、相当の学習レベルに到達していなければ難しいとのことである。近隣のダラムやニューキャッスルの大学施設を借りて授業を行うことをあるようだ。

6. 最後に



研修時には、コロナウイルスによる影響によって上記のような掲示が、ダラム・スクールの玄関に掲載されていた。中国人留学生も多数在籍している現状から、生徒が帰国することが可能なのが心配される。このような情勢のような中、歓迎して下さった関係者の方々には感謝しかない。また複数回に渡り、訪問させていただいており、帰り際には「またいつでも来てください」とまで仰っていた。今後も引き続き、連携を取ることが大切だと思われた。

また視察にお邪魔した各学校では、EU 離脱に伴って国家レベルでの教育政策に手を回す余裕がなく、財政面でのサポートが少なくなり、締め付けがより厳しくなり、教職志望者が減少の一途を辿っているとの話があった。特に他の学生が論じているようにオフステッドがこの様相を上手く生かして、独立行政法人にも関わらず、現場に介入している。この制度は、日本の教育がイギリスの教育制度を手本にしてきた歴史を踏まえると、導入されても不思議ではないと感じている。その際には、日本ではどのような影響が考えられるかについては今の段階から議論を重ねていくことが必要であろう。また個別支援を要する生徒の増加や応じた支援の在り方については、日本よりイギリスの方が進んでいると感じる。今後もイギリスの教育界の動向に注目していきたい。

海外学校教育実地研究を終えて

伝統と文化、子供たちの目的意識を感じたイギリス
安藤 拓也

日本教育とイギリス教育の比較から

石川 真理代

今回の研修はコロナウイルスと台風により現地での行動が制限され、行程の変更を余儀なくされた。当初は9つの学校見学を行う予定だったが、それが5校となってしまった。また、エジンバラ訪問も中止となった。そのことを知った瞬間は大きなショックを感じたが、空いてしまった時間を無駄にすることなく、ダラム、ロンドンの視察に充てることで予定してなかった多くの発見があった。

ダラムでは、大聖堂で行われているミサに参加をし、町の人々を結び付けている教育を超えた大きな力を感じることができた。また、百年以上も前の建物を大切に使い続けている様子から、伝統が町を作っていること、町が伝統を重要視していることを自然と理解することができた。

また、ロンドンでも、美しい都会の街並みを残しつつ、近代的な要素をプラスしていることに感激を覚えた。2回のミュージカル鑑賞も自分の心を大きく揺さぶった。観光客が多数を占めていることもあるが、連日多数のシアターが満員になる事実を知り、大衆娯楽としてミュージカルが受け入れられていることにうれしさとうらやましさを感じた。

このような伝統と文化を背景にイギリスの教育は変化を続けていた。日本と同様な課題を抱える中で子供たちの様子から感じたことは目的意識だった。重要視されている大学進学に向けてどのような気持ちで日々の学習に向かっているのかが見てとれた。自分が大学でどんなことを学びたいのか。何のために今学ぶ必要があるのかという意識をしっかりともっている子供たちが多くいた。ただ単に大学に行きたい、ちょっとでもいい大学に行きたいという意識よりも高い次元で将来の自分を考えられているようだった。今回見学できた学校、説明を受けられた学校は少なかったが、そこで感じられたのは目的意識。今、日本でも学びに向かう人間性にスポットが当てられている。イギリスから帰国して改めて、自分が前に立つ子供たちには、しっかりと自分の将来や目的に向かって意思決定できる機会を作ってあげられる教師になりたいと強く感じている。

I'm a Physics teacher at public high school. と日本国内で、イギリス出身の方を含め、自己紹介をする機会はこれまでであった。しかし考えると、イギリスのパブリックスクールとは私立学校であり、エリート養成、英国一流名門校、映画ではハリーポッターの世界観からくる寄宿舎生活、といったイメージが私の中にあっただ。こういった素朴なところの比較から、日本教育とイギリス教育の比較を始めることにした。そもそもイギリス教育については階級制度を前提に考えていく必要があるので、文献書物で調べても分からない“雰囲気”“空気”については独断で想像することにした。最近の情勢からは、ブレグジット (Brexit) の影響があるが、旅行中に直接、その影響により困る場面はなかった。また、イギリスと表記しても、対象はイングランドであり、連合王国を構成しているスコットランド、ウェールズではイングランドと若干の違いが見られる。こういったことは、実際にイギリスで生活をするともう少し理解できるのではないかとイギリス訪問後の今でも思う。そういった様々な社会的背景等によって、イギリスには複雑な教育システムがあることを改めて知ることができた。人口から比較すると他を圧倒する人数を抱えているのがイングランドであるし、これにより教育体系でも大きな影響力を及ぼしている。更に日本人口と比較すると日本の規模の方が圧倒的に大きいため、単純にイギリス教育と日本教育の比較はできない。実際に今回訪問をした各学校の規模、生徒数をみると、日本国内における私の経験した教育環境とは規模が小さいことは共通していた。しかし、現在の教育庁 (文部科学省) と学校との関わりの違い、理科教育の実際、教員の勤務状況、統一試験の効果と課題など、直接イギリスの先生方へ質問し、体験しないと分からないことも多い。一方で両国に共通していることは、生徒のために何が出来るかを常に考え、教員集団が結束して対応にあたり、学校地域各家庭全体で良い教育環境を構築していくことにある。今回の訪問でイギリス教育の一面を知ることができた。再び訪問の機会が得られたら嬉しい。

日本が真似たイギリスの教育

小松 千草

イギリスを訪れてまず感じたことが、日本にいる感覚と似ているということだった。もちろん、街並みや風景、文化や歴史などは、全く違う。訪れる所々で、歴史ある建造物や教会、城等を見ることができ、感動した。しかし、人との関わり方やそこから得られる感触、公共の場での装いやマナーなど、日本とよく似ていると思った。それは、これまで日本が、イギリスの制度や方法を取り入れ、真似てきたという歴史的な背景が関係しているのかもしれない。あるいは、島国であることやももとの気質が似ているのだろうか。学校を訪問し、話を聞いたり、授業を参観したりした時もそれを感じた。

参観した授業は一斉授業が基本で、児童・生徒は教師の話の聞きながら、各自がノートを取り、熱心に学んでいた。時には実験を行ったり、ペア学習や討論を行ったりしながら学習を進めていた。問題を黙々と解いていくような習熟のような場面もあれば、問題解決学習のような場面もあった。定期的にテストがあり、生徒はそれをクリアしていくために、そして、次のステップとして進学や社会での活躍を目標に学習に取り組んでいるようだった。授業のやり方や教員の研修体制はもちろん、現在抱えている課題などについても日本とよく似ていた。

オランダを訪れた時には、個に応じた教育、ゆとりや自由のある教育といった印象が強く、日本とは違う点ばかりが見つかって大きな刺激を受けた。そして、教育は、児童・生徒が今後どのような社会の中で生きていくのが、大きく関わってくるということ強く感じた。2つの国を比較すると、「効率よく、質の高い教育を行う」という目的は同じだったように思う。しかし、それどう実現させるか、取り組みが違う。どちらがよいということではなく、今後、日本がどのような方向に向かっていくのか、それを考える上で、オランダとイギリスの海外研修は、自分にとって価値あるものとなったように思う。イギリスの教育がこれからどう課題を解決し、効果を上げていくのか、今後の動向からも学んでいきたい。

教材研究としてのイギリス研修

石井 祐作

私自身、魚山先生に強く勧められ、今回が人生初の海外訪問になったが、なぜ私が縁もゆかりもないましては危険であろうイギリスに行く必要があるのかと考えた。色々な方々に「逆になんで行かないんですか」と言われ、決死の覚悟で「試しに行ってみるか」と決めた時には、「遠い星に行くのだな、二度と日本の地を踏むことはできない」と心から思ったものである。

今回の研修では、主に①困難な状況下でどのように打破し、プラスに転じさせるか②現代の日本の姿の源流はイギリスにあること③外国から見た日本の素晴らしさに気づかされた。

台風やコロナウイルスによる影響で、渡英後に視察中止、研修先宿泊先変更を余儀なくされたが、先の見えない異国の地でどのようにプラスに転じるかは、今後人間として生きていくのに先の見えない社会、教育界、人生を生き抜く精神と同じことが言える。

社会面では国を司る国会でも二大政党制による議会制民主主義の限界なども日本と同様の問題点を抱えているのではないか。だからこそ教育面でも、社会科教員としても今後のイギリスの動向を注視していく必要があると感じている。

ロンドンでは、日本食が持つ繊細さを身に染みて感じた。遠い日本のことを考えながら、食した天井と牛煮込みの味を今でも忘れぬことができない。

無事に帰国することができたのは、魚山先生をはじめとした教授陣5名、現職教員3名、そして通訳をしていただいたMIKIさん、偉川さん、また今回の研修の携わっていただいたすべての方々 コロナウイルスによる影響で世界情勢が慌しい中、研修先では視察を快く引き受けくださったことは感謝しかない。生涯忘れられない研修となり、飛行機が羽田に着陸した際の安心感は二度と忘れることができない。感謝しても感謝しきれない。